八多
玉すだれ
は

宮内省圖書寮

長治寸志抄巻第四

同縁

上杉義人妻女強盗事

弓鉄砲并罪邪并事

火車之説并猫取死骸事

宮内省圖書寮

夫婦すたれ巻第四

上杉藏人達女強盗変

上杉藏人達女強盗ありて孫ありし。上杉藏人国忠と云
る一家徳多中に上杉憲方ありて孫ありし。上杉藏人国忠と云
わり。憲忠討死の後、孫の孫倉と辞して播磨赤松よりしみ
ゆきしが、ちゝ人一先頼まるゝやとたのもうふ旅ち
用きして僕をもぐせし只一人。伴るわ里と立出く。
足よ内の者て急きる。元来智謀すぐれて。弓矢
物よ達し。はあまりれうをうわざ人を人ともそうだ。
世の誹れ家中をわろく山城城の道よあるまて。更よ性
来もるやをかるねどもこゝろを幸ともせず唯又せうの
ろうんのほとゝいと恐しあるを山路よりうを日ハ既り
書かれ。足よ内の者て樵よ入ろうに。とゝろ行者よ

七尺ゆたかなる大の法師さしかゝりしが何おもひけん立どまりて仁王立にはだかりける。
師弟は法ぎきて五六人なるに何ともなき大の杖ととめかくを
持て何ごときあり。猛然とすゝみ出てすはくせものござんなれ。
中ニ選みしきものくて道とまゝ猿のあらそひを速によらうて
をもとときて通さんとなる洞をとかなみがへに法師もなし。
無くに入の物をはがれて世はあさまなる人もなしぞ。命
惜しくば太刀かたな衣裳をぬがせて通しけれ。しよまし。をも
夜の内すさび人へ事やうなる男ハ一人ならでハ敵対すべきやう
剣も合しても宝をわがもちたるで西に及ぶとぞ云く
とはあるべき。むかうに太刀をぬき放て大の法師の真向
ぬけて仕つけまり。待にて血を見る男の左の耳の際を
肩さきへ切付けり。しかしもころ人へとたてさまに倒れける。

さいはいなきものにて。次に男腕を貝をばかいくはへて
て何く見も合て、さまざまに松原ぬけていらいらとなく
萬事は蔵人大勢に取籠られてはあけりと思ひまわせ。
あてりれども葛ちらし足を討に落きわにとひもよう
ならぬ道に先をゆいかれせんもれく松の大木にぞもたれ
かかりけり。擬よ身をかくし息をとゞめてうかがひかくて数百人を
さまり扉を分て尋求るに行方知らず大路くるまで男もなし
一人などくとめがきて絵なき骨も剥かしもの見えて未だに修元が
敵のことひは坤へ向ひし天紀さんまくしづかくくらせ集るべし
とて大幕川大はしわたりきて見へかゝりまして燒上させりくらわく
日中れし若人がかり居たる松の木の下にてもし
つまりきろうなくて大路を見ききてん白く尋常に容貌

いにしへよりかくしはなわきまりありてかくろくまゐとはくり
鬘とかくるにゆひて立烏帽子をいこみうりきぬの下より
腕巻して大口ゐるを高くと門ちらまみ織に器量ある
げらくに萬端の大将ともみえたり。床机に腰をうけさるを
さわるも女なり十八九斗の女二人。むかし装束志くるが
左右に侍るものかくありしとゆめ罷とも人もかくぬ山賊
とも數百人並びゐてどりりく衛兎志かの衣是はげにすす
ほまへるの女強盗が巳として此ふ成べし器量よき姿と
いひいひふもして都方として稽首に出るまちまれ助とも世
とるやとみへて旅りを務めて居りたる程に滿座ゑ歳
實乃趣訓ふも成くわくに開じよきるとなどとくとゆき
數百人にして許垢とてしと折まより盗人も本より下た

泣につきて御ぞともわびあへしき屋形に帰し。今は女ちく
さうにかり破り込へたる程に屋形の内にとひうるねかまへ
もはかびまへる男女もうちうせ切あへ御奥へ切入て
へゆくや。亭に男をみえて大太刀と閉るめ込へとのそと数々
よ切ちらし八方とおぐり立たり盗人共も所をとすまし
とかけて影をし出たるたれぬるわきてそあ柄の太刀もひ
こぶで既に施向ふ家の結所と旅人にとあらく袖にとぶらう
まずぞ吾にゆゆせすら前く泣ひてゆりゆらはらとも此形付
あしども何れも出けす御くかくて立ちまちんも同し命なわち
うましと討死して君が命にかりかりんとて太刀ゆきたる
くわけちまとかり太刀に志むしそ命甘めぐりて同じや
太乃腕をと斬かけしもはの首にも所をとやがて首ときり

ゆきて人や者かと下知をくだしてこれを乱入して財宝奉行
ちかい所にて人員をかぞへ遠国りきの山奥にて
人もかよはぬ深谷の間より入る義人もかすかに残なく入てこれ
を洞内一町ばかりすすめくらきあり内より入奪ひ来る財宝をあらわ
家数かりやのくらきあり内より入奪ひ来る財宝をあらわ
さんろう義人ともへ入るよりつらつらとさを義人こうはいに
よ申ばらく山人命にかりなまぶ家をもうべきといい
へこなぶりのこれより義人こうはほうくよりものがりかく
こうりぬ女性義人ゆきとなて遠国りいろりもれくるて寝殿
とかりき所よりもおいりるくもいるかくかりかりとり
やくこんぴらいりくこてもうしりとうひ絶縁を結りきわ
りきとこを出入るも義人ねづかい都ちきこうし

果よりかれ姫成しき十七ろ云歳びの男女昔を立ちうう
さをせうの敵を打ぶるもうもけばしてうもかくはひ
ぶりきに対をいろ法師よりざおりまの所よりかくれうり
ゆきこれ女をかどりいかにあくぬきよ世を送りかるあ
遊辺より伊賀を山賊ども皆ひづきんうくく音あと待の
数十人迎まどもんよりけ夫ありしろ世とおくともまいりう
ぬんまりきのかたくうくて法なくて法色。
食をすいぬ和尚ぬんしてをとりて国へいりかく
て打ちどいよりうにをとて世世ひ人もわわどんぬま
どひてわりうわを是りそわはくれるい乱うんとわりも天
性世義人をすぐわてきくやうりうりうわくあよはど
いばやうをを送りきを女と世人ありでりく世よなきう

なかりし飢へばくらしかたく且かく世を世しも思はぬ何
よりも盗も行く月日をへ安く暮しけるにはわれもまさず
かの氏なき家を出山賊強盗と呼ばれても口をしきともおもはず
忍び出るやころひあらわし書画して都をともなひて
やりしに鳴渡手に取りしまて首も斬く晝をわたし罪
因まてとんぎてゆく河原よりへを棄しとぞ塚原なりけり
らしともなき白骨どもむくむくと起あがりて悪人をとり捕へんを
踏そへてころは限りもしらずひろくありけり。
いやうへを解りなれせんるきまさこそ怖しく打ひく。
逸足を出して逃まけるが漸く桃園乃御社乃前よりけるを
老もあ息をはぎて休らひしが社乃拝殿にまどろ
みまかかれる暁方にかの白骨ども怖しき形と

成くなめく御階の本にまちりて御社よりやさしく紫袖の貴人
くもり居給ふ表狩衣にて修羅の苦患をもたすけ給へと念じや
と三周に許へなわし暫して拝殿の御戸を開きて衣冠正しき神
人出向ひて御ひらが中なるものなり之に似たり汝ども此ものこそ光
ものの志をまもるくだし下し給ふよも修羅乃業はやむ
だらしすでに退散もへしと仰せられしが世にいふ力をしそ悟る
こそりて長きめ夜ら悪人を平らげ給ひそし月よしなかなてすに
退しそ数の者の命をとりぬれば今日なん根つぎと神拝助けせ
かしまはすれ背ぎこ此そ盛衰をもうくる夜も漸く明るを
まこと則ち髻切て発心し諸国修行に出すがりおもむし
すん東へ来國切り脚の打ちかみ浮る方を尋ねるにかかり
う屋形のかちらも見えわたく維みとまきまはげもなくて茅の

こゝろえてある所ともみえけりされば
あられぬりきもむしの論かことの思ひけりしまたに新たなるぬく
盛者必衰無常迅速の理をわきまへざるにあらずといへども
一生の間に六道を輪廻して終も輪廻とめぐりそのまゝ一路
の行業をなすにあるをもつくなく延たる善根もしまらひ已に
かけて冥途の旅にもとづきぬ行すゑを頼て黄泉の道の粮とせん。
縁なく招ひせまるまじと佛法の理もさとりがたしいかなる計
をなして浄土の門にもせまりがたくなく業くるしむ世に
人の雑義ともなき少しほどの大きなる善根なし山賊強盗の人を
殺し世をぬすみてくるしむわざ強盗の身に陥りける
て人を助る計をなしてむかしに念佛して往生の素懐をとげ
ざんといひたてめてまことのありて強盗にはじめりんせ

いづれの盗人ならん懐より儲ひろう掛人のもとへの附の書
むら人ぐぞしくして其越人をおどし物をかくけるをもとめ
ひらしそのにくみをそむかずして人を助けりなくして施を
平時は今すかくるべし善時は用ふるしくて必をくずる奴
も強ひらりかく為念仏の功化念おりそりの首肉かくる
とられて掩非仕のものとこれをつくる
あん馬手に鬼道の阿弥陀の像をまつりて経に従ひ付し
かとみるに鎚をきておやしくらひて為法師を解ゆる
しては坊の強盗をなさんといふしいて法不審しりやば
そのく不道にて其物のりさにしてはいへといふて唯ずれ
いなりよ聞ありてそふといふとも其ものに深りうむく
こゝへきる掩非仕手れ稲を語りておゐりれのてきさく

思ひ儀といへど射術師なくして達てはまたれ其細なるもの
ふりしといへども得られず後世のために見えしは武勇のみち
に調ふる故何といふ此道を以て姦猥をもせよや己が思ひわくの強盗
の途に人を殺し義も許れぬ物を掠めどるを事は不便に於かねべ令
とも賊事猶ともかくもさせてよきるの事が今一向に此宗ををやにの受る
こゝひ立て物みな業徒らん仕かねりの此夏の身に思ひいりて今すも潤
譲るかねがしらけるらしが掾は衛の御心に付ひてなうしはありやと
を論し議談せもの此義上に奏聞してゆるしあひのみのるゝ
後は弓る所までの群族に交て衆生を済度する
もむよ人に其の趣の事にむらし識りきずく成しゐのれべく

弓釼明神四討邪神事

越中の国となみ郡志かの郷に一人の隠士あり藤原良遠と
云ふ弓術者歯国の住藤の仲季在世の名手は昌家一の数に
擧りてよく衆ある男子を都に住せて上へ後の折のある我
のたてを生徒りの此男子は家の代の雲として釼と龍
才とて人の弓矢を残しあの子成人の後はいかにも望ある
天文を尋ねしして田畠数十所をはなれて上洛志あり
幼がの時より自家のちのよかかりて志向く眼さし細なり
きれ。勢高く強力勇猛にして才智又世に擬するわく弓
馬の道に達し岩巖ても押しとほすに入てはあるから勇と
引よ弓矢を挑ては楊雄を比ぎしむき弓勢へ超ゆる所
射通さずといふかし振舞あるうも人倫に及ぶすから
し、都に狂獵をなし山野河海を家とし廿余歳の生縁を
遂げらうみれのるわく森中との切り文は射的して世かとも

出ようとせしに、孩母はいさめうるわるもよく逆ひいかるるもよく逆ひ
よ思ひていんまりせず世まわるもいいぞ。そのそがきたりこよ
も地ゝむやうて兵庫の者猟漁をわさやうしをなを
送るにはまべて不思議なるまきもかりろる歳日御れと
く馬よおの楽塩の山ばくひよ。奥山深く入きろ歳ろ歳々
さまに翠華きまにのわりろ森く多洞庭よてば山みゆうく
樹間い暮ゝまゆゝまども。日いまごかさむうん。寒よわる谷
流うん人れ吟ゆ。夕ゆりかるる人後ちろ多深山よ人れまべ
きゆうとあゝずいうのまよ獣のそらひあうむとそるを
うせて月ゝようきゆゆうりれちゆやとしまびて常ゆる使
とあゝゆゆうまゆ人ゆりゆ。臭さうろほうりれ艸木ようたり。
鼻とゆうきてを付ろわをみうに。城よ不浄れ女の病人

いうはうまうと尋ましに。涙民癒とち病を愛て又母一緒。
鼻ばいしひて。生ゆゆ。拝うるはうるる獣のうきゆ。
早く命を拾うやとうども鳥獣ひ人臭をいうひあうりうう
ずかひ拾ゆ命をまて苦痛ち作る表敵ひれ悪悪う
命をとうたうたゆうの人こ法うりあうをてはだひわく。
仁ひるうるのゆわうしゆ表に笑て拾いるる地ゆ業ゆ盗
ちうるゆいうりやとゆひるんをべて山病よゆゆ業ゆしど
又母親ゆもうるゆてゆるんどとゆるうとうしゆ人れ祖ゆ者一
ひ業ゆくひどもひひ絶ゆうし苦ゆ良遠ゆよひうう。
ま人ううていゆ一まひて居いうるうず人を助ゆたしいうりゆま
しうやうて救いむうもむうゆ人後ゆゆうず吉ゆをうくひ
得させむとうひ切て彼ゆ五特をうひ。村年代所も換せ

ゆる所なしかれども目をぬかぎ鼻をおほひて臍はほしより
ねがりかはれ臭さ絶ざるなれば深き慈悲を以て漸くれば
至るに病人忽に容を変美麗の形と変じみどりの髪を
揚柳の風になびくが容皃端正の男となり着たる衣は錦
となり臭さかはりて霊香となり時に女性は遂に謂て云
我は此山の神龍田姫といふ也汝に前生の縁ありきまで道心
の程をためさんために丈婦の姿を現して苦しき情を為
すんと云けりとて山上にとまねきかけ錦をかぶりた
る八葉の車は大きなる牛もつらくよのましゅう従ありて
とまりぬ則下蔦とうらせてそもなひ令たかひ旁にありて
浅からぬ珠なりとてめに霊酒儀を門にみちて天上の音し
とける佛の道は旁にありしぬがごく去れるあ告けてるは女性云

すりは常かも内兄さく待まどかにゆるをぬ其帝庵都へ
入給ふ是れ多ふいられ所へ来りあまたし其の時又見参に入給ふ
ぬべしとて別まて長けてくるよりて一町斗ありて
後をかへりみれば雲霧たちて紫雲の雲風吹きさを
送るが其夏を母にも語られ不思儀あるすふいかがく
怪しく思ひ給ふべく終に絵の日にも成ちつく行る
事なてかれ所よりて宮の遊業とすの車忽然としかり
ぬれば其篋をかくしてら遠がるをさとりて車に伴ひ
子孫を一夜にかくして暮ぬすくせれききんありて帝
のゆるしを蒙り今に二つひあひみぬば後おかく内
にゆる事なくりし汝が家に微妙の咒法あり聖権の主
経と名づくこれを誦く信受まわりて神仏の妙をとげて

一切れ足駄を履き山刀を帯して立ち入り深山わり。こし
古仏の霊窟なり。洞より入て堂を修し。練行の人し門
徒僧俗に叶ひ給ふより通力自在の術をなす。恵き彼堂より
行て杖をひきつゝ。こゝ会ぶらんとて。庵もぬるとなく
のぎくつわくつわく。勇猛なる遠女の数よりも
ぜんぐに洞へ入て二度くるゝあいを聞て。
吹を修し杖をなくし。絵ひとりにいつくしく。
通をなつて洞中いみきけ苦を生しつゝ。
をまて一の幼女を見て苦を衣服とし。鳥獣菓蔬を供し。二人を
山谷をかつて随侍仕をなす。霊しく智徳聖性として。
数の僧ありて山線をして。遠へ行もむくよ。道と共に
行きずめ洞へ入て髪の僧を黙遠として。

赤の色はいとより。恭敬礼拝して皆中りとあす。儀
二人の美麗の女性をもつて。ぐしも深山の者とうつる。二
女人仏のもつて。是戒を無乃人。儀として。
者にまさに。の者をうつむ伝のうち山をあすを
れ二人をか議して人間に送ひ。ひとし二人ばみ女
僧よ字形を彫り。ひろしに髪杖と成て二人をしさけ。
宮殿のもつて。光をうつる。間人里に。雑投捨て
玄女二人をんを。獣鬼を。ようとうをうつ。室入り
遠て。ひるを。絵ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。
世山よが。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。
良遠として。ひ。ぎれ人。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。
二ひい。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。

年ちかきまいて屋形乃掛よ宣らう立てゆり綱ハ雲とうづまいきう矢ハ二龍ゆめ屋ゆめ別その旧江を改て新よ社檀を造営し二きれ神宮とこめてら綱ハ高そて霊験あらねよまいりくと結きて三人ハ傍侍ハ前よ

ちいじ。則四神よ条沿ハ。御諸を掛りて地こそりまいりん。

ら後恵光ハ四ハ都七条辺よ常ハ清水寺国道ちやうこ

先達ハ山伏北国ハ霊場を分れきろかハ笑越中を巡り

てどうのみちうき鷲を尋ねに日ハ已よかるもきく人傍を

山道をわけ分そんたうきよ。とゆくら森落ちり。綱よ黒

ちるりてすきまくるハ毛ちきりにちうら異形のゆ

あちまにくてそ法師ちりて変よ別うと年ろ新し

ちわく足をちりて迎ちうあまりハ思ろしさに涙と

ゆ

ゆきちわく頭ハ結のおくく眼むりわくき髪そちりハ黒

あるとちろ学て迎ちゆ関達ちよ級のを敵し迎足

を知て御くと社まてかくりけきを遣よ紅とちわく堂

まれ月も高ハ山ちに出さわしやくくちりハきんゆりと

ちわく人筋と立はゆきちう別社檀ハ片隅よりづくまり。

長ちくりく仏経を通しハ法ちゆ邪鬼とぬちくく

通せるゆ神威うすきに出ちりと且ハちんみ且ハ彩とき

ゆ。ちりに黒部ちわく神殿よ神ハ水ハ御ハ御ハ御三ちよ。

神殿ハ山ちりと御く関達変ちに黒紙ハちく黒

ちりハちに焼ハあきくちに一人ハ神女門階ハりちに

立宗社ちゆハ立鳥階まに布衣きくく下に狩衣ちちく

いち神人四五人ちゆハ立て座とちかとちに神女ちちひハ

あ[illegible]の風の森の祠堂より迎へて神殿より所[illegible]
くへを換宮とぞ[illegible]
うんあるの所より数遥とゆるまの[illegible]
をそなへ珠しすれの[illegible]勅命り別雲あれの[illegible]
ちらく[illegible]下りと錦の袋よりへうの[illegible]
名の結ちりはくとたかくまりし[illegible]
して稲書むらめき[illegible]
ちらめき[illegible]
たれば[illegible]
るを[illegible]
検しあき道路より捨[illegible]
なのく休息ゆるへしなけ[illegible]

神女の門殿ゝへ入ると云て夏さめぬふ思儀よるかゝく感
源をおゝし。礼拝多端尼を法師しもり法甲とゝわて来
社のまゝとの中より所ゝ戸起らけうりいあゝそるゝ。社く
よ女帯ゝ。人氣よ多り堂人をあ門めありし体者美
夏と法ゝと堂人あられ。風の森に化地蔵きられゝ
祝ひゝる郷人あゝとかゝひて仮寝よりてゝるに夏う
月ゝに遠ゝ。立辞両ゝ多足見ゝ。ゝく分よ
と毛沙八出熊のゝゝ傳へきく猟くとゝ人多默ゝ
其毛ゝ弟来松さけ。石ゝとゝ荒景ゝ貴物
神威を感ゝと堂遠ゝ敬志ゝ。園遠も体
祝ゝと止ゝ社内よ居ゝとゝめ礼典参礼の規式と異ゝ
引宮ゝ成て神長ゝと崇めゝ法法ゝ

法乃ゝけ法人安坊ゝを分ゝ

火車の説

法石東国方人死ゝわて骸をうゝひゝ川ゝきて来
校よりけ或ゝ黄ゝをゝきぎよ生ゝをゝきよい屍と虚
空よりゝむて失ゝ中もゝりゝわゝを火車と名付て
法ふにゝゝりゝとゝ。ゝべて実来ゝと法ゝす国ゝゝ
も絡ゝ来ゝゝゝゝ。みゝい仏ゝゝゝゝゝ。ゝ
人みゝ仏乃よたゝりて後生我ゝ。仏神をゝゝみ。
信ゝと祭ゝ事ゝ直ゝをゝゝ。四条よ法ゝ世ゝ
波火車ゝ妖怪もゝわゝよ成ゝゝゝゝ。ゝ出ゝ人きい事生
無ゝ妄ゝ多ゝ地獄鬼高もゝゝゝゝ来ゝゝ法
後生ゝゝて百ゝ拾六地獄も皆同ゝゝゝ

ゑこ皆一人乃逐悔よりのちもこばうのふい仕換おそい三ゑ
四くゑ一大半ゑり ゑる位 ゑる度のゑりの佛神ゑ祈つも試
ゑ更業とりゑめて世法とゑ祈いゑゑ唯ゑ絶
りゑうとゑりゑ死はゑゑゑ出業ゑうゑほうくゑわゑゑゑ
ゑ死しても善界ゑまわゑ悪業ゑゑゑく高位ゑいゑれゑ
くゑ佛ゑりゑ生れゑゑゑとゑゑゑゑ佛ゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑ下位ゑゑゑゑも生ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
畜乳更ゑゑゑ生ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑ悪ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

他人邪欲ゑりゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑ禅宗乃ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

列位将職まもんで偶御志ろゝがほしうく彼名重れ得つんぞ大師あ
恨み読よこれ頭の世をさらむとすと卿乃者しもおりや例の手
りそ又ゆる主佞よましてまんらわしが先哲かく沈め姉しる。
る輩れ偶従もきさるにらひかのくねうめかなほうりしゆるか
とに山毛元己よ禅つゑふあれをゑさじとゆるされ深く
座禄鋭ほよ入て寝舎のうちとぞ妄想働動をおさめて
箫然として座しけり読よおもひ激久よ招のへ。焼中へかつらに
草れかまに数多なるよ倒たるまゝて是猫住家乃まへよ
同をわうめていよりがくしかる所よいたくかまれく。
衣猫乃声して呼出し去うだ。此猫住しと蒼く出ける
やり之れかゐむくきあろ所より出てぞ前の猫投撒り
はいかそ云きろく名れ玉れ錦四すでよ立ちひ方何ぞりぬ

卿乃こゝらくらゐ合くゝろゝし御塗もいよいよ堅く果しが鈎ゑれ
魑魅とゆゑどとく形と有ことこゝろえわし寺れ猫答へ
まろへ。舐る此家れ連衆いそのきいへしそ放任我乃心あ
いかはくにとらはれず何縁福よにょらんしに怪よ慈へ
て形ありて。五元此夏乃婚縁を貝ずよや。くいかく鍛錬を
こゝろしす。此猫又もとの所にかへりてはいまうかいお
りのちえ時住職此猫をとらへしふもきま人あゝをもと霊田紙れ
殺を以萬物れ霊なる佛性同体乃人免と嫉布はらる寺
瞭れよ。彼禅つよれそいかいかんがあり障悍と人に
そのまゝ速まに追刻ゝて猫犬まてらもとしてに吼しかへ
押さるゝ伏拝る猫乃むしあくを起して逃去ね
当老人なゝりしとて以ふうらるゝ老人乃事と言来ゆ

ひとり一郷の者どもすべてやとをかけきれどもとのくに横たをかき
ゆらめて物遠よりみるに黒くして暗夫体よりかき暈り黒
雲一ひら棺のごとくにはひてうずまきたるうち赤かるも動
あり雲をひきすべりて導の門をさしかれ黒雲のごき
つとおりくるりと巻文を唱へ音とあげて高らかに業報の
心を説き高猫の真言を唱へ護摩の法を行ひ
せしかばしばらくして猫めいとぢ
ぬきへ雲晴くくもりの晴くるとなく成よりくるくる
りと巻き終の紙を取ひらいて時して後へと
人々つき高坊のたいまを見て罪業をしこ
るるうちしていめく苦しびうかれしてもんを置て
きて猫とあげめて遠く
去りとうとう後永く絶よ

去る天和の頃の高槻の城下の町の妖怪の妖
怪のことをいひ邪気内に入り元気を奪ひ邪気
かたりすべて言葉を奪ひて煩はせ
きしこと花散乱も慶安
病ありてあり花を乱ることとしまた性
ありしかの妖邪ひとしの中ゆるんや振ひ
六塵六欲の境界
常にまことくるしみ
ふるうして霊祟ふ
萬境よりとうし蝶の
よ祀りたくたくに用ふ
うづくして化度天
中よりの弁持ふ黒成の形

もはつてすまへ　豪鬼はり。うれ精氣正しうわんぜんなる白
非道の僧ちものづくうかつを以魔障をたりもくえよ
はなる愚人を彼より移を僧を主おくて信を主はをとこ神力佛
力よりて自心を信とゆくべ進よ法華法西天彼邪よ孫太
塗つとやいつるつくれ農民あり俗り姫をとも猛の城下の
商人より孫を結ひて送りしかし商人へてでしかしずして
又貧なりうわと孫を塗つぶりきうりにとひ七夫に成ろ男よ
一人をまれ方に殘して母を屋をしくろしよ母をこひ
て一里あまりれ道をたとりて後く母よ逢よあるうれ
孫を塗つ悔すきものいくを後を母ふを達せ次逢逢しろ
よかの母孫よかをみのうるもるりの逢ほくの手ゆり
しのへと信とでもをよ耳ふを実ひをぶこうをとに

よ悔ふ孫をろるのつと年くれ知て孫をよろれ母ゆるとを親薬
をむしてを夜らかくをは孫よ死へよみぐりろりとを收び
ひをまこを夫よ相ゆを年をかくを含も含ばりをを呉こうの墓地を
ひとおく喰く花無うて居ろりかくて日数もをぐれこを
まろのをもをくをひいりふを塗てりろうこ数れ孫よ彩
彩を山伏よ頼くて彩を成後しろわをおえて孫を。
ゆをりれ絵をさに杖を山りに霊佛の業師を来れ影
ろるが山別南とをくをろうをあくねらんれ理越ふとろた
まひくに三日になびをる孫をよ孫太郎よ猫を病
人れ来りて兵一夫高く吹て無成吹く怒よ死ろりつをて
花無うて居ろ病人霜の清ろおくをよをつくと成てね
上ろをとくに清入ろりこ後屍をとろをとに跡を帰ひ来

此猫乃兒入ハく三十日ばかりをすぐるころ始ぎれ。世の中の人
を遂りあつゆう妝をなすまでむりしよるもまつ狸といへども
变る猫乃所為なりいとゝあさき見れ夜なきさわんといふ人多も。
まゝ猫乃すゝまゝしるゝ性て天然と轉るくものまてむかみ
眼ハ二六時中に開ぬを那りし。気ゆめは律ならぬを出して織り
陰獣乃出あり。陰気陽を隠して人気を奪ひ化して人に
かしてなす。魔性乃二気ねこまといへるよしなるや。猫ま
たハ中の書籍にも多く記したるより流布一般ことも叔とくなり。
飼ひおかん人への心へきなるべし。